

私の転任

大山 晴子



花が咲き、若葉が萌え始め、生きとし生けるものが蘇る四月。それはまた多くの人々にとっても新しい生活、新しい人々との出会いの始まる季節です。

入園、入学、進級、就職、転勤と、それぞれに気心の知れた世界を抜け出て、未知の世界に足を踏み入れるのですから、希望、期待、喜びの一方で不安、緊張、迷いといったさまざまな思いがはげしく交錯する時期でもあります。

自分に向けられた人のことばや何げないしぐさに深く勇気づけられたり、逆に傷つけられ自信をなくしたりするほど神経が鋭敏になっている時期ですから、受け入れる側は相應のあたたかな思いやりが必要でしょうし、これから始まる好ましい人間関係のためにも、出会いの第一楽章は大切にしたいと考えます。

幼稚園で新入児を受け入れてしばらくの期間に毎年くり返される子どもたちの泣き、逃げ、拒否するさまざまな抵抗や葛藤の姿を、この四月は全く新しいものを見るが如き感慨で見守りました。

「不安なのだな」「悲しいのだな」「家に帰りたいのだな」「ようすを見ているのだな」

子どもの表情のひとつひとつに、新しいものになじんでいく必死の心持が読みとれるのでした。目も耳も心も子どもと共にあってはじめて分りあえることができたような気がしました。

私もこの四月に現在の幼稚園に転勤となり不安と緊張に張りつめた新年度をスタートしたのでした。

「ここは、本当に自分をそっくりそのまま受けとめてくれるところだろうか」

「この人は、本当に自分にとって安心していい人なのだろうか」

子どもが幼稚園に抱く不安や、保育者を確かめているまなざしは、とりもなおさず私自身の新しい職場や人間関係に向ける問いかけそのものだったのです。

この転任は私にとって二度目の転任でした。過去・現在の三つの幼稚園とも公立園で、小学校の併設、園長は小学校長の兼任、都心にあり自然に恵まれないなど園の経営、立地条件はかなり似通っており、園自体の違いからくる不安はさほど大きくはありませんでした。

前回の転任が、新しいものを吸収したいという自らの意志で希望した積極的なものであったのにひきかえ、今回は自分の意志にかかわらぬ言はば行政上の配転で、それも学級担任を離れ、主任という立場に変わるものであったということが大きな違いでありました。

まだ当分学級の子どもの只中において保育の心や方法をつかみたいと思っていましたし、実際、主任という立場に立つだけの確とした保育論も指導力も統率力もない私が、現実の諸事情から自信もないままに止むなく引き受けたのですから、心境は複雑、転任に伴なう不安や緊張はひと通りのものではなかったのです。

学級担任時代とちがって園全体の子どものことを考え、保育の内容を検討し、行事を計画し、父母関係の交渉をする。考えねばならない対象が大きく広がり、思考の視点を高いところに置かねばならないということは、

当初の私に立ちふさがった難題でした。その上前任の先生が私とは親子ほど年の違う保育の大ベテランですべてにわたって行き届いた立派な仕事をされた方で、その跡を引き継いだ以上は、跡を汚さないようにせねばという気負いが私自身を更に精神的に追いつめていきました。

しかしながらすること成すこと失敗やつまづきの連続でした。自信が持てないままに、ともすると今までの慣れた生活や前の職場がなつかしく、過去をふり返ったり、学級担任への未練を再燃させたりして、しばしばマインスの心の働きにとらわれました。

しかし、私の心を救ってくれたのはやはり子どもたちでした。学級担任とはまたちがった場と形の触れあいの中で、保育の喜びを前よりもずっと確かに気づかせてくれたのです。

用便を失敗した子の始末を手伝ったり、具合の悪い子の熱を測ったり保健室のベッドでは付添ったりする時に

すべてを私にまかせている子らの表情をこんなに愛らし
いと思つたことがあつたでしょうか。

「先生、僕の作つた絵、これだよ」「私のも見て」と言
つて、私の手を引っぱっていく子どものちいさな手のぬ
くもりをこれほど温かく感じたことがあるでしょうか。

「白雪姫の劇をするからお客さんになって見に来てね」
「ひとり足りないからリレーの仲間に入って」

「今日はもも組のへやお昼ご飯を食べに来てくださ
い」

子どもたちが何かと遊びや生活の輪の中に招き入れ
られます。ふたりの担任の先生も時として目をおおうば
かりの混乱の場であっても私が足を踏み入れても拒ま
ず、折々に、学級の中に誘い入れる心遣いをしてくれま
す。

園で二匹のウサギを飼っており、年長組が当番でその
世話をしています。ページの抽出しをタワシで洗い新聞
紙を敷き、エサを与えウサギを庭で運動させるのが仕事
です。

ある日、私が子どもたちの作業が終わつたあと、野菜
のクズが散らかつていたのでホウキではいて始末したの

です。次の日、子どもたちが、私のした通りに、まわり
のゴミを、ホウキではき始めたではありませんか。

私は胸を熱くし、こういうところにも限りなく保育の
場面があるのだと実感したのです。

自分のありのままを出すしかない。主任として経験も
浅く若すぎるのなら、若い年の子どものへへの接し方を大
事にして補うほかはないと、自分に言い聞かせました。
失敗すればこそ物ごとを着実に覚えていくのかも知れぬ
と思つたら、ずい分気が楽になりました。

涙ぐみ、苦悩したこと多い日々でしたが今まで見え
なかつたものが見え、気づき、新しい問題に目を向ける
よい機会となりました。

考えたことの一つを述べたいと思います。

○心の痛みを思いやる大切さ

自分が主任となつてはじめて今まで触れあつてき
た幾たりかの主任の先生への申し訳なきに胸が疼きま
す。自分の触れあい方に別の動き方、心の遣い方があつ
たのではないかと思うのです。

「ただ自分ひとりの思惑で物を言つたり、事を成した

りしなかったか」「自分の学級だけの都合で物を考えることはなかったか」「正義とか信義とかの名のもとに徒を組んで、主任ひとりを向こうにまわし小気味よく建前論だけをふりかざすことはなかったか」

「これほど雑多で多岐に渡る仕事を抱えているのだったら、『何かお手伝いすることは、ありませんか』と、どうして気持よく申し出なかったのだろう」

我が身をつねって人の痛さを知る如く、人の本当の気持は、その境遇におかれてみないと分らないことがあるようです。

保育の場でも同じです。幼稚園をいやがって泣く子、母親と離れない子、遊びに入れない子、おべんとうを食べない子……。さまざまに心に懸かる子があります。

困った子としてとらえ、外側から、あるべき姿の生活や行動の枠を押しつけるよりも、その子の心の内側に新しい生活を受け入れる準備が出来るのを待つ……つまり泣いている子の泣きたい気持をそっくり分かってやる。それが子どもの心を安定させ、次のものが育つ一番の働きかけでしょう。

入園当初、家が恋しくなったり、友だちと衝突して泣

き出したりする子たちが、園のどこかに自分の気持を安定させる場所を持っているのに気がつきました。

E子は職員室のソファに、M男は玄関の長いすに、H男はへやの戸口の柱の陰に……。事あるたびに泣き顔で駆け込んで、じっとこらえ、やがて自分自身で立ち直って仲間の所に帰っていくのです。「どうしたの」「みんなの所へ戻りましょう」などのことは無意味なのです。子どもの悲しく苦痛にくもった顔に「悲しいのね」「口惜しいのね」と心持ちを分かってやるうなずきを返して、あとは子ども自身が自分の気持と闘う時間をゆっくり待ってやるだけです。新たに気づいたことです。

園長が事あるたびに、

。ものごとを判断する基準は、子どもにとってどうなのかに置くこと。

。行事・儀式・保育内容を問い直し、踏襲するのではなく創造すること。

と、言います。このことは重みを胸に問いなから、二年目を、今度こそ積極的に、しっかりした足どりで踏み出したと思います。(東京都中央区立昭和幼稚園)